

豊かな地域社会を築く担い手集団としてのJA青年部

主事研究員 若林剛志

JA青年部(以下「青年部」というと、どのような印象を持つだろうか。組合員のうち若手組合員間の交流の場であるという漠然とした印象、あるいは農産物貿易交渉時の農政運動やデモ行進を想起するかもしれない。もちろん、こうした機能や活動があることは事実である。しかし、以下にみるように、青年部は地域活性化につながる多くの活動を行っており、その点でも少なからぬ意義を有している。

1 青年部の動向

青年部は、JAの組合員組織のひとつであり、若手組合員が任意加入する組織である。2014年4月現在、全国に515あり、そこに盟友と呼ばれる約6.2万人の部員が所属している。全国農協青年組織協議会(以下「全青協」)によると、盟友の年齢はおおむね45歳未満が多いという。ただし、青年部のなかには、青壮年部と称し、規約により年齢の上限を高め設定している所もある。

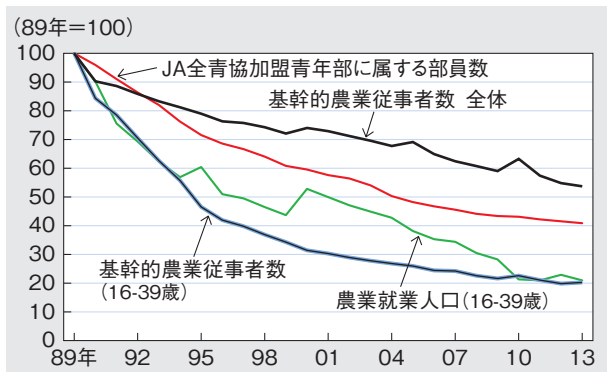
第1図は1989年(平成元年)を100として、全国の青年部盟友数の推移をみたものである。盟友数は減少を続けており、その点では日本の農業者数と同様である。減少のペースを比べると、盟友数の減少幅は、16歳から39歳までの農業就業人口および同基幹的農業従事者数よりも緩やかであるが、基幹的農業従事者数全体の減少よりは大きい。その要因として想定されるのは、青年部に属することができる者の要件が、各青年部によって異なり、39歳以上の盟友も含まれるためである。

2 地域活性化の取組み

農業と地域をつなぐ取組みとして、食農教育、6次産業化、最近では農福連携などがあげられる。青年部の活動は、これらと密接に関わっている。青年部の活動指針であるJA青年組織綱領の筆頭には、「農業を通じて環境・文化・教育の活動を行い、地域社会に貢献する」ことが掲げられているし、全青協の創設目的にも、農業を通じて「豊かな地域社会を築く」ことが掲げられている。全国の青年部は、それぞれに濃淡はあるものの、このような精神に基づいて地域活性化につながる活動を実践している。その優良活動事例は、毎年開催されるJA全国青年大会で報告される。

食農教育は、青年部にとって十数年来の中核的活動である。青年部は多くの場合、昭和の大合併後の市町村、あるいは平成に入り実施されたJA合併前のJA単位で支部を構成している。その支部が地域の小学校等で児童向

第1図 青年部盟友数の推移



資料 「農業協同組合年鑑」「日本農業年鑑」「JA年鑑」「農業構造動態調査」「農林業センサス」
(注) 1989年の母数は総農家数、1990年からは販売農家数である。

けの農業体験や食および農にかかる出前授業に関わっているのである。

更に、近年は地域の様々な組織と協力して、地域活性化の取組みを強化している。しばしばみられる事例は、青年部と地域の商工会青年部との連携である。例えば、遊休農地を利用して青年部盟友らが栽培した農産物を、商工会青年部員らが加工し、両者共同で販売を行う等がある(こうした事例は、家の光協会発行の月刊誌「地上」に多数掲載されている)。

農福連携の事例として、例えば、青年部が養護施設と協力し、施設の学生に農業体験の機会を提供している。ハンディキャップを抱えた学生たちのなかには、農作業を通じた刺激が心身に良い影響を及ぼすこともあるようである。

3 強みと弱み

青年部の最大の強みは若さである。活動のなかには、若いからこそ円滑に事を運べるものもある。例えば、15年に開催されたJA全国青年大会のなかで最優秀組織活動とされた事例は、農商官学の相互補完的連携だった。特に農業者と大学の学生との連携においては、青年部盟友が若いからこそ、同じく若い学生との円滑な交流を通じてより協力しやすい環境が生み出されていた(15年大会の様子は、「地上」15年5月号を参照)。

そんな青年部も、盟友数の減少は悩みの種であり、それが廃部や支部の統廃合等の存続の危機につながる場合もある。しかし、盟友数が少ないことが、同時に強みとなることもある。盟友が少ないからこそ、より深い意思疎通が可能となり、活動対象を絞り込むことで密度の濃い取組みが可能となるからであ

る。15年JA全国青年大会でも、10年前に6名で再結成された青年部支部の盟友が、「実施したいこと」「実施可能なこと」に集中して取り組む事例が報告された。彼らは、地区の小学校の生徒への出前授業と、栄養不足に悩む発展途上国に住む児童へ給食を届けることに活動を絞り込んでいる。

4 豊かな地域社会を築く担い手として

こうしてみると、各地域で取り組まれる青年部の活動は、社会、経済および文化的活動として、広く認知されるにふさわしいと言える。そして、「地域社会に貢献する」「豊かな地域社会を築く」という目的は、決して言葉だけの飾りではなく、彼らの活動こそ、豊かな地域社会を築くための地域に根付いた取組みと言えるのではないだろうか。青年部はJA内の組合員組織であり、法人格のない任意組織であるものの、その活動のなかには、今求められている食と農のつながり、農業者による農業関連ビジネスへの挑戦、福祉的效果を持つ農業の多面的機能の発揮が含まれている。

全国約6.2万人の盟友は、将来のJAにおいて中心的な役割を担うとともに、将来の日本農業の中核を担う人材でもある。農業者に今後ますます求められることは、農業経営に邁進するだけでなく、事業者として食農教育や農福連携のような社会的責任を発揮していくことであろう。青年部盟友は、若いうちから「地域社会に貢献する」ことを目的とした青年部活動によって、社会的責任を果たしている。

青年部の活動を知ると、その活動が、実は深い意味を持つことに気づかされる。引き続き、彼らの活動からは目が離せない。

(わかばやし たかし)